

私が5年間暮らした北海道大学で、寮の寮祭のひとつである。髪を背中央で伸ばして振り乱し、無精ひげをほおまですげし、ぼろぼろの着物を羽織り、高げたに乗った応援団長が、ホラ貝を「ブォオーン」と吹く。あたかも、自らを鼓舞し、周りの輩を鼓舞するかのよう。1887(明治10)年、北大の初代教頭クラーク博士は、日本を離れる時、「Boys be ambitious (少年よ、大志を抱け!)」と、見送りに集まった多くの学生たちに自らの思いを伝えた。世間では、「大ホラ吹き」と「大ウソつき」を取り違えている方が多い。この



自分を磨く

誇り」という意であるのと同様に、「うぬぼれ・傲慢(ごうまん)」という意も持つ。これらは紙一重である。それでは、どのようにして自信を持てはいいのか。古野庸一氏の著書「リーダーになる極意」によると、優れているといわれる日本の経営者18人に行ったインタビュー調査を通して、彼らに共通する特性として、「修羅場を乗り越えた経験」「終わりなき成長意欲」「高潔さ」などを挙げている。私たちは、修羅場や壁を乗り越えた時に初めて、いつの間にか自分の能力が格段に上がっていることに気付く。

私が参加した東北大学大学院経済学研

「プロジェクト地域活性」
代表取締役社長

望月 孝

(仙台市)

二つは、似て非なるもの、コインの表と裏の関係がある。大ホラ吹きは、自らの志を大きく持つが故、周りの人からは大ウソつきと間違われる。志は、大きければ大きいほどいい。なぜならば、人は自分の志以上に、大きなことは成し得ないからだ。仮に幸運にも自身の志以上のことが実現されたとしても、その状態は長くは続かない。なぜなら、自身の意欲と能力、そして体力の準備が整っていないからである。

東北には、昔から多くのことを実現した「大ホラ吹き」がいる。古くはアテルイから始まり、奥州藤原4代、伊達政宗、原敬、太宰治、宮沢賢治、、枚挙にいとまがない。

私たちは、大いに「大ホラ吹き」でありたい。自分たちの地域をいかに豊かな地域にするのか、自分たちのビジネスでいかに世の中のために高い価値を提供するのか、自身の家族をいかに幸せにするのか。志は大きく、多い方がいい。

自信 がなければ、「大ホラ」は吹けない。自信とは「自らを信じる」ことであり、日本語のニュアンスの「プライド」とは違う。プライドは、「自尊心・

大きな志を前進の源に

究科地域イノベーション研究センターの地域経営人材育成プロジェクトでは、東北地域の優れた企業の経営者21人のインタビュー調査を通して、経営者かどのような学習形態で学んできたかを考察した。

学習形態を①本人の直接経験による学習：「経験による学習」②学校や社内外の研修などでの概念や理論の学習：「概念的学習」③他者の言動などの観察による学習：「モデリング(観察経験)学習」の三つのパターンに分類して定量分析した結果、「経験による学習」が91・9%、「概念的学習」が6・4%、「モデリング学習」が1・7%であった。また、経験による学習では、その経験の中で他者(両親・先生・上司など)から教えられるケースが約6割を占めていた。

今後環境変化が激しくなり、ますます先が読めなくなる中で、過去の経験則だけでは通用しない。自ら新しい情報を取りに行き、日々自身を変えていくことが求められる。机の上で考えても、何も始まらない。私たちは大きな志を持って、小さいけれど、とても大きな一歩を踏み出した。